

妹から学んだ人権について

甲斐市立双葉中学校三年 平井 漱介

僕の妹は不登校だ。これを聞いたらみんなはどう思うだろうか。僕はよく妹と全然違うと言われる。僕は学校が好きでいろいろな活動に積極的に取り組んでいる。しかし、妹はその逆だ。学校が嫌いであり学校に行かない。これだけの違いで妹は否定的な言われ方をする。学校に行かない。これだけでこんな言われ方をされなければいけないのだろうか。

小学生の頃妹はむりやり学校につれていかれていた。母と先生二人掛かりで運ばなければいけない程妹は暴れていた。毎日のように泣きじゃくり、部屋に鍵をかけて閉じこもる日もあった。学校に連れてこられる妹を見た人は多分全員「変わった人」だと思っただろう。その姿を見られたくない妹は年が上がるにつれて大きく抵抗するようになった。学校に行く回数もだんだん減っていった。こうなると周りの人からはさぼっていると思われる。そのため少しのいじめを受けたりすることもあったそうだ。学校に行かないと「さぼっている人」学校に行っても「変わった人」と見られる。本当に学校が嫌いな人にとってはどんなにつらいことか僕には想像もできない。

ある日、妹が「なぜ学校にいかなければいけないのか」と聞いてきた。あまりにも普通の質問だった。だが僕は答えることができなかった。学校に行くのは普通の事だとしか思っていなかったからだ。「なぜ好きなようにできないのか」「行きたい人だけが行けば良い」妹はこのように言うのだ。妹にとっては学校に行かなくて良いという考えが普通なのだ。僕はこの時初めて普通を勘違いしていたことに気がついた。普通の基準はそれぞれ違うのだ。とても単純なことかもしれないが、とても重要なことだ。普通を勘違いしているだけでさまざまなことがぎくしゃくする。妹へのいじめが生まれてしまったのもこのせいだろう。「人間は誰一人として同じ考えの人はいない」これを理解して素直に受けとめることが必要で、人権を考えるうえでも大切なことだろう。

もう一つ、妹はこんなことを聞いてきた。「みんなと違う事を言って

も良いのか」だった。これについても僕は答えられなかった。違うことを言っただけでその場の雰囲気が悪くなるかもしれない。かと言って言わないままならみんなに分かってもらえない。妹の場合はなおさらだ。妹の「違う事」とは学校のことだ。妹の学校に関しての意見は周りの人と明らかに違う。だが、分かってもらえないとクラスに馴染むには難しいだろう。僕だけで簡単に答えられることではなかった。だからまず、家族の中で話し合ってみることにした。妹はその時、初めて自分の気持ちを言った。学校に行きたくない理由、学校の嫌いなところ、今まで思っていたことを全て話した。もちろん家族の中であっても意見が対立することもあった。だけど僕は、この時に妹が話をしてくれてよかったと思う。今中学生の妹は学校に行く日数を減らしたり、クラスを変えたりして学校生活を送っている。家では勉強もするようになり、前よりも笑顔も増えたように思える。このような生活ができるようになったのも、話し合いがきっかけである。周りに合わせたりするのも大切だと思うが、自分の思ったことを素直に言うことが自分らしく生きることにつながってくると思う。そして、その意見をすぐに否定しない、違う事と向き合う態度が必要だと思う。

これまで妹について話してきたが、このような事は他にもたくさんあると思う。学校には、不登校の人が少し居るし、全国で見るといじめの数は全然減らない。人権の尊重は法律によって定められている。だが、自由に過ごせていない人、自分の意見を簡単に話せない人たちはたくさんいる。人権とは、調べても難しい言葉でざっくりとしか書かれてなく、形のないものなので深く考えづらいだろう。ただ、みんなが自由に過ごすうえで理解しなくてはいけないことなのだ。ぜひ、軽い解釈だけで済まらず、深く考えてほしい。

僕は妹のおかげで、自分の勘違い、自分の意識の低さに気づかされた。そして、人権がどれだけ大切なのか、どのように考えていかなければならないのかを知ることができた。僕は、勝手に決めつけずにどんな事でも向きあえるような心の広い人間になりたいと思った。

最後に、僕の意見は周りの人とは違うかもしれない。これから先、否定的な事も言われるかもしれない。だけど僕は周りとは違ってもいい。僕の考えは僕だけのものだから。

